

データ同化手法を用いた 向い波中の3自由度船体運動モデリング

- 第81回実海域推進性能研究会(2021/07/05)発表資料の続報-

大阪大学大学院 工学研究科 花木 孝明 箕浦 宗彦



イントロダクション①

● 不規則波中の船体運動の時刻歴から、船体の付加質量と造波減衰力を推定する方法を提案する。



- 波浪中の船体動揺は、<mark>運動方程式</mark>により記述される。
- 運動方程式のパラメータの精度の良い把握は安全運航に役立つ。
- 数値計算や実験による網羅的な性能把握はコストがかかる。
- 船上で計測する波や運動のデータを有効活用が実用的である。
- 計測データの解析技術と数学的・数値的手法を組み合わせることで、既存理論の精度を向上させ、 その限界を克服することが期待される。

イントロダクション②

第81回の研究会では、new strip method (NSM) に基づき波浪強制力を入力、船体運動を出力とする数学モデル (heaveとpitchの連成を考慮) を定式化した。

問題点

- NSMによる波浪強制力の推定精度 → 短波長域で連成流体力係数の推定精度低下
- surge運動との連成の考慮 → pitchのピーク付近がとらえられない



RIOS bulker の計算例

イントロダクション③

本研究の最終目的

● 実運航する船舶で計測される時刻歴から、実海域における船体の流体力特性を評価する

本日の講演内容

- Improved NSM に基づくシミュレーションモデル → 波浪強制力の推定精度up & surge の考慮
- データ同化を用いた向い波中での3自由度船体運動モデリング
- 実験データを用いた提案手法の検証(RIOS bulk carrier and container ship models)



パラメータ推定手法の概要



パラメータ推定手法の概要



6

Improved NSM

<u>速度ポテンシャル</u>

$$\Phi(\boldsymbol{x},t) = -U\boldsymbol{x} + \operatorname{Re}\left[\phi(\boldsymbol{x})e^{i\omega_{e}t}\right]$$

$$\phi(\boldsymbol{x}) = \frac{ig\zeta_{a}}{\omega} \left\{\varphi_{0}(\boldsymbol{x}) + \varphi_{7}(\boldsymbol{x})\right\} + \sum_{j=1}^{6} i\omega_{e}X_{j}\varphi_{j}(\boldsymbol{x})$$

$$\varphi_{0}(\boldsymbol{x}) = e^{k_{0}z - ik_{0}(x\cos\chi + y\sin\chi)}, \ \varphi_{7}(\boldsymbol{x}) = e^{-ik_{0}x\cos\chi}\psi_{7}(\boldsymbol{x})$$



境界值問題

Radiation 問題

Diffraction 問題

$$\frac{\partial^{2} \varphi_{j}}{\partial y^{2}} + \frac{\partial^{2} \varphi_{j}}{\partial z^{2}} = 0 \qquad \qquad \frac{\partial^{2} \psi_{7}}{\partial y^{2}} + \frac{\partial^{2} \psi_{7}}{\partial z^{2}} = 0 \qquad \qquad \text{for } z \ge 0$$

$$\frac{\partial \varphi_{j}}{\partial z} - K\varphi_{j} = 0 \qquad \qquad \frac{\partial \psi_{7}}{\partial z} - k_{0}\psi_{7} = 0 \qquad \qquad \text{for } z \ge 0$$

$$\frac{\partial \varphi_{j}}{\partial n} = n_{j} + \frac{U}{i\omega_{e}}m_{j} \qquad \qquad \frac{\partial \psi_{7}}{\partial n} = k_{0}e^{k_{0}z - ik_{0}y\sin\chi} (i\cos\chi\varphi_{1} + i\sin\chi\varphi_{2} - \varphi_{3}) \qquad \text{on } S_{H}$$

運動方程式



- Improved NSM の場合、 $A_{jk}^m = A_{jk}(\infty)$ および $B_{jk}^m = B_{jk}(\infty)$
- *C^m_{ik}* はある範囲で Kramers-Kronig の関係を満たすよう最小二乗法により定数係数として決定する

パラメータ数の削減および計算効率の向上を試みるため、以下のサブシステムを設計する[2]。

[状態方程式]
$$\dot{x}_{jk}(t) = A_{jk}x_{jk}(t) + b_{jk}\dot{\xi}_{k}(t),$$

[観測方程式] $y_{jk}(t) = c_{jk}^{T}x_{jk}(t) \simeq \int_{0}^{t} L_{jk}(t-\tau)\dot{\xi}_{k}(\tau)d\tau$
 $x_{jk}(t) = \begin{cases} x_{jk}^{(1)} \\ x_{jk}^{(2)} \\ \vdots \\ x_{jk}^{(n)} \end{cases}, A_{jk} = \begin{bmatrix} 0 & \cdots & 0 & \frac{1}{T}\alpha_{jk}^{(1)} \stackrel{1}{=} \alpha_{jk} \\ 1 & & +\alpha_{jk}^{(2)} \\ 1 & & +\alpha_{jk}^{(2)} \\ \vdots \\ & 1 & 1 & \alpha_{jk}^{(n)} \end{bmatrix}, b_{jk} = \begin{cases} \beta_{jk}^{(1)} \stackrel{1}{=} \beta_{jk} \\ \beta_{jk}^{(2)} \\ \beta_{jk}^{(2)} \\ \beta_{jk}^{(2)} \\ \beta_{jk}^{(n)} \\ \beta_{jk}^{(n)} \end{cases}, c_{jk} = \begin{cases} 0 \\ \vdots \\ 0 \\ 1 \\ \beta_{jk}^{(n)} \end{cases}$

パラメータ α_{jk} , β_{jk} を $f(\theta, t) = L_{jk}(t) - c_{jk}^T \exp(A_{jk}t) b_{jk}$ を最小とするよう決定する。 ● データ同化する際の初期値となる

計測データの逐次解析によって、パラメータα_{jk}, β_{jk}を時々刻々と更新する

状態空間モデリング&自己組織化

運動方程式を自己組織化状態空間 (Self-Organizing State-Space; SOSS) モデル[3]として実現し、状態 変数とパラメータの同時推定を行う.

状態空間モデルは一階連立微分方程式によって表現できるので,解析的に離散化できる.

[3] Kitagawa, G. (1998). A self-organizing state-space model. Journal of the American Statistical Association, 1203-1215.

モデルの離散化

連続型状態空間モデル

$$\dot{\boldsymbol{x}}(t) = \boldsymbol{A}\boldsymbol{x}(t) + \boldsymbol{B}\boldsymbol{u}(t) + \sqrt{\boldsymbol{Q}}\boldsymbol{v}(t)$$
$$\boldsymbol{y}(t) = \boldsymbol{C}\boldsymbol{x}(t) + \boldsymbol{D}\boldsymbol{u}(t) + \sqrt{\boldsymbol{R}}\boldsymbol{w}(t)$$

解析解を用いた離散化 with Δt [s]

$$A_d = e^{A\Delta t} = I + (A\Delta t) + \frac{1}{2}(A\Delta t)^2 + \cdots$$
$$B_d = A^{-1}(A_d - I)B$$
$$C_d = C, \ D_d = D = 0$$

- 連続型状態異空間モデルの状態方程式は時間刻 み幅 Δt で解析的に離散化できる。
- ◆ 確率的な誤差項 $\sqrt{Q}v(t)$, $\sqrt{R}w(t)$ を状態方程式 および観測方程式の導入する。

離散型状態空間モデル

$$\boldsymbol{x}(t) = \boldsymbol{A}_d \boldsymbol{x}(t - \Delta t) + \boldsymbol{B}_d \boldsymbol{u}(t - \Delta t) + \sqrt{\boldsymbol{Q}} \boldsymbol{v}(t) \equiv F(\boldsymbol{x}(t - \Delta t), \boldsymbol{u}(t - \Delta t)) + \sqrt{\boldsymbol{Q}} \boldsymbol{v}(t)$$
$$\boldsymbol{y}(t) = \boldsymbol{C}_d \boldsymbol{x}(t) + \boldsymbol{D}_d \boldsymbol{u}(t) + \sqrt{\boldsymbol{R}} \boldsymbol{w}(t) \equiv H(\boldsymbol{x}(t), \boldsymbol{u}(t)) + \sqrt{\boldsymbol{R}} \boldsymbol{w}(t)$$

パラメータ推定手法の概要



3.1 アンサンブルカルマンフィルタ (EnKF)

■ 予測ステップ 事前状態推定値: $\hat{x}_{t}^{(i)-} = A\hat{x}_{t-\Delta t}^{(i)} + b_{u}u_{t} + bv_{t}^{(i)}$ 誤差共分散: $P_{t}^{-} = \operatorname{Cov}\left[\hat{x}_{t}^{(i)-}, \hat{x}_{t}^{(i)-}\right]$ ■ フィルタリングステップ カルマンゲイン: $G = \frac{P_{t}^{-}C^{T}}{CP_{t}^{-}C^{T} + \sigma_{w}^{2}}$ 事後状態推定値: $\hat{x}_{t}^{(i)} = \hat{x}_{t}^{(i)-} + G_{t}(y_{t} + \check{w}_{t}^{(i)} - C\hat{x}_{t}^{-})$



[4] Evensen, G. (2003). The ensemble Kalman filter: Theoretical formulation and practical implementation. Ocean dynamics, 53(4), 343-367.

パラメータ推定手法の概要



検証 – RIOS bulk carrier model



状態推定 – RIOS bulk carrier model





● EnKF による状態推定の結果は、確率変数の 95% 信頼区間から合理的である。

付加質量と減衰力係数 – RIOS bulk carrier model



運動方程式の同化によって全ての流体力係数を推定可能(バーは10回解析した際の標準偏差)。
 Surge と heave はほとんど連成しないため、a₁₃, b₁₃の推定精度は相対的に低くなる。
 流体力係数の推定精度は、波浪強制力の推定精度にも依存する。

船体運動の周波数応答関数 – RIOS bulk carrier model



●運動方程式の同化により得られた周波数応答は実験データによく一致する。
 ● Case-1 と 2 ではスペクトラムの周波数帯が異なるため、推定結果に違いが出る。
 ●実海域で遭遇するのは Case-2 のような短波長波が多いと予想される。

18

検証 – RIOS container ship model

19



L(m)	2.500
B(m)	0.385
d(m)	0.140
$\nabla(\mathrm{m}^3)$	0.0813
KG(m)	0.158
κ_{yy}/L	0.2500

◆不規則波中船体動揺計測試験の条件











 短波長の Case-1 や Case-2 で KL が小さい領域には 波が存在しないため推定値は不安定になる。

同調周波数 (RIOSコンテナ, F _n = 0.25)	λ/L	KL
	1.250	12.24
	1.500	9.572



・運動の同調周波致付近において運成流体力係多 NSMに比べて実験値とよく一致する

同調周波数 (RIOSコンテナ, F _n = 0.25)	λ/L	KL
	1.250	12.24
	1.500	9.572

船体運動の周波数応答関数 – RIOS container ship model 24



 短波長のデータを同化した結果は λ/L > 1.0 で実験値と乖離するが,長波長のデータを同化した結 果は INSM に比べて特に同調周波数付近で Experiment (2022) とよく一致していている.

- Improved NSM をベースに時間領域におけるシミュレーションモデルを定式化し、データ同化手 法を用いた向い波中の3自由度船体運動モデリングの手法を提案した。
- 2種類の模型船を用いた実験を行い、計測した波変位から improved NSM により予測した波浪強制力の時系列データと、計測した船体動揺の時系列データの同化により、船体の付加質量と減衰力係数を推定し、提案手法を検証した。
- 運動方程式の同化には、入力である波浪強制力と出力である船体運動のデータが必要である。波 浪強制力が理論値と等しいことが前提であるため、精度向上のためには流体力学的関係式の利用 による波浪強制力の同時推定が必要となる。
- ・周波数応答関数は、長波長域におけるデータを用いた場合では実験値とよく一致するが、短波長域におけるデータを用いた場合では大きな乖離がある。長波長域では船体は大きく運動するため、パラメータを推定しやすいが、実海域では相対的に短波長域の波に多く遭遇することが予想される